

# 層

## 上方と下方、無限に連なる「層」

梅澤北明(ライター)

物の本によれば、層の戸はシカハネではなく、屋に含まれる戸。重なりあった屋根のさまを指し、のち楼に進化する(ある)『漢字語源辞典』(学燈社)。楼の層は上に連なり、あるいは下に連なる。それ自体で完結することは無く、常に接する上下との連関のなかにあるといつていい。独立しているようで依存し、依存しながら自律し、たがいに重なり合いながらやがて天を衝く高樓をなす。そのような運動が層には潜む。スタティックでありながら、ダイナミックに全体を構成する、流動と安定を同時に実現する運動である。我々の意識が層状になっていることを指摘したのは、周知のごとくフロイトである。思惟の下層には混沌とした、だがエネルギーに満ちた魅力的な象徴の沃野が広がっており、その蠢きが時として我々の意識を規定する。隠された層が我々の現在を構成しているのだ。目を転じて、空を眺めれば、そこにも層はある。地球の大気圏という大きな世界を、たがいに折り重なって構成する大気の層である。大気の層は、高度11kmあたりまでは、雨が降り、日が照るといった気象がうつつ対流圏をなし、その上層には成層圏、中間圏、熱圏が連なる。1974年、旧ソ連が打ち上げた探査ロケットは、地上70kmという超高度の中間圏で30種類あまりの生きた微生物を採集した。零下100度以下の酷寒の高みに広がるニッチを、こもなげに浮遊する小さな生を容れる層が地球にはある。上方と下方、無限に連なる層のどこに我々はいるのか。